R５地域協働研究（ステージⅠ）

R05-Ⅰ-14「各校の特色を生かしたシビックプライドの醸成教育プログラム及びコーディネート機能に関する実践的研究」

課題提案者：盛岡市
研究代表者：高等教育推進センター　渡部芳栄
研究チーム員：小嶋康之、勝又洸樹（盛岡市）、高瀬和実（高等教育推進センター）

＜要　旨＞

本研究では、岩手女子高校を研究協力校としてシビックプライドの醸成も意図した地域課題解決プログラムを開発した。探究活動運営の経験を持ち、地域とのつながりも多い山崎智樹氏をコーディネーターとして、より良いコーディネート機能について、関係者の意見聴取を通じて改善を図るアクション・リサーチ手法を採用してきた。プロジェクトは狙いの確認・テーマ設定、調査実施と立案、報告会、報告書作成の４期に分けて行い、探究のサイクルを実現できたことは成果であった反面、学校内部での調整機能や他の教科（教員）との整合性については課題として残った。

１　研究の背景等

盛岡市は「シビックプライド」の醸成とシティプロモーションの推進を目的に、第二次盛岡ブランド推進計画を策定し、令和3年度からは「盛岡まるごと学びの場プロジェクト」を実施している。このプロジェクトは、地域課題に取り組むプログラムを提供し、参加する高校生や大学生の地域学習を支援している。プロジェクトには盛岡市内・滝沢市内のいくつかの高校・大学の生徒・学生が参加し、地域学習の拠点「盛岡という星で BASE STATION」（以下、BS）を開設した。

令和４年度には、地域協働研究「地域課題解決に高校生等が参画することによるシビックプライドの醸成と教育的効果」を実施したが、自治体や地域の関与の程度が異なる上、そもそも地域とのつながりは少なかった。また、高校ごとの探究の時間の取り組み方や地域学習の進め方にも差があり、一部の学校では単発で終わっていたことも事実である。

そこで本研究では、研究協力校の協力を得て、総合的な探究の時間を利用して生徒のシビックプライドとキャリア形成に資する教育プログラムを開発し、地域・行政とのコーディネート機能に着目しながら、各学校の特色を出しつつ、自律的に運営できるプログラムのあり方を実践的に研究した。

２　研究の方法

学びプロジェクトではいくつかのモデル校を指定しているが、モデル校のさらなる充実・発展を期して、岩手女子高校に研究協力校として依頼し、教育プログラムとコーディネート機能の開発を実践的に行ってきた。

教育プログラムについては、「シビックプライド」を醸成すべく地域課題解決を内容としつつ、学校の特色を活かして「女性」をキーワードにプログラムを開発し、これまでと同様にBSでの自主的な調査・学習を促した。また、コーディネーターとして、探究活動運営の経験を持ち、地域とのつながりも多い山崎智樹氏にお願いした。

今回の研究においては、客観的な指標による評価ではなく、関係者（生徒、高校教員、コーディネーター、地域団体等）からの意見聴取によって課題を見つけ、継続的に改善していく方法（アクション・リサーチ）を採用した。

３　研究の経緯

１）狙いの確認・情報収集とテーマ設定期

活躍する女性の話に耳を傾ける生徒たち

第１回（5/12）	プロジェクトの狙い・ガイダンス
第２回（5/19）	地域課題解決プロジェクトの事例
第３回（5/26）	盛岡市の政策
第４回（6/2）	テーマ設定、グループ編成
第５回（6/16）	活躍する女性たち
第６回（7/7）	課題設定

第１回では、プロジェクトの狙いを共有した。第２回では大学生の地域課題解決事例を紹介し、自分たちが最終的にどのようなゴールを目指すべきかを確認してもらった。第３回以降では、自分たちの関心のあるテーマを設定してもらうために、盛岡市の政策や活躍する女性たちの回を取り入れた。第３回で盛岡市の政策を入れたのは「シビックプライドの醸成」のため、第５回に「女性」を入れたのは岩手女子高校の特色を生かしたプロジェクト実施のためである。なお、第１回・第４回・第５回・第６回の授業においては、コーディネーターによる全体調整と地域の方・団体との調整を行ってもらっている。

２）調査実施と立案期

第７回（7/14）	調べ方の学習と調査計画
夏季休業中	地域調査実施
第８回（8/18）	準備状況報告会
第９回（9/1）	地域調査結果の分析
第10回（9/15）	課題解決案の立案①
第11回（9/22）	課題解決案の立案②

第６回まで実施するうち、生徒の中から「何のためにやっているかわからない」という声が聞かれるようになった。情報収集の時期であり、多様な情報に埋もれて目標を見失ったものと思われる。また、関心のあるテーマ・課題を決めたとしても、それを検証したり、確たるデータをもとに解決策を検討したりする方法については、通常高等学校では学ぶ機会がほとんどない。

そこで第７回では、再度プロジェクトのゴールを確認しつつ、現状を知るための方法としてアンケート調査とインタビュー調査の方法についてレクチャーした。その後生徒たちは、夏休みから夏休み後にかけて地域の人・団体にアポを取り、適宜BSを活用しながらフィールドに出てアンケートやインタビューを実施した。それらを分析し、それらをもとに課題解決策を検討していた。これも令和５年度の調査で「地域の人たちとの協働については、必ずしも十分とは言えなかった」結果が出ていたことへの反省であり、単なる思いつきではなく、地域の人・団体のニーズを受けた解決策の立案のためには必要な作業であった。この期においては、コーティネート機能は、外部との調整というよりむしろ、学校内部での調整機能が重要だと感じられた。すなわち、本来総合的な探究の時間やキャリア教育に求められている、「学校教育全体を通して」という視点の共有である。

３）報告会期

第12回（9/28）	報告資料作成①
第13回（10/6）	報告資料作成②
第14回（10/13）	報告資料作成③
第15回（10/20）	報告資料作成④
第16回（10/27）	報告会準備・リハーサル①
第17回（11/17）	報告会準備・リハーサル②
第18回（11/24）	報告会

学んだことやそれを活かして行った調査、及びその調査結果をもとにした課題解決策をしっかりとまとめ、報告（アウトプット）することは探究活動においても重要である。それゆえ、６時間ほどの時間をかけてしっかりとプレゼン資料を作り込みつつ、発表の練習もして、第18回ではお世話になって地域の方や下級生の前で自分たちの成果を報告した。この間においては、報告会を行うことが最終目標ではないことを意識した教員の指導が中心となった。学校教育としての第1段階のまとめの時期であった。

地域の方や下級生の前で堂々と報告する生徒たち

４）プロジェクトのまとめ期

第19回（12/1）	報告書作成①
第20回（12/8）	報告書作成②
第21回（12/15）	報告書作成③
第22回（1/17）	報告書作成④
第23回（1/26）	報告書作成⑤

令和５年度の研究結果では、「レポート、報告物作成」の取組が相対的に低く、実践して終わり、あるいは報告して終わりとなる傾向が見られた。そこで、５月以降のプロジェクト全体を振り返りつつ、直近の報告会でのコーディネーターや地域の方々からのご意見も反映して報告書の作成を行ったが、この時期も学校教員による指導がメインであった。

４　まとめと課題

本研究を通しての成果として、「女性」という研究協力校の特色を生かしたプログラムの開発、コーディネーターによるプロジェクトの調整及び外部との調整については実現できたと言える。また、「課題の発見」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という学習指導要領上の探究のサイクル（１サイクル）も実現できたことも成果である。

その一方で、学校内部での調整機能、すなわち、学校教育全体―総合的な探究の時間―プロジェクトという関係の再構築は今後の課題と言える。学校教育の全体貫く目標の中で総合的な探究の時間の位置づけ（総合的な探究の時間は、単に教科の1つと捉えられない）や、それゆえ学校・学年全体で取り組むべきことの確認と学年・学級との協働について検討しなければならないだろう。さらには、総合的な探究の時間の目標とプロジェクトの目標の整合性などについても、担当教員のみならず、学校教育全体で検討・共有していくことが今後の課題である。

５　謝辞

コーディネーター役を引き受けてくださった山崎智樹氏をはじめ、ご協力頂いたすべての地域の方々、岩手女子高校の生徒･教職員の皆様に心より感謝申し上げます。